

第72回日本皮膚科学会中部支部 学術大会を終えて

(2021年11月20日・21日)

※奈良県コンベンションセンターとWeb配信のハイブリッド開催

浅田 秀夫

奈良県立医科大学皮膚科学教授

はじめに

2021年11月20・21日の2日間にわたり、第72回日本皮膚科学会中部支部学術大会を開催させていただきました。当大学の主催は2005年に宮川幸子教授(当時)が第56回学術大会を主催して以来16年ぶりで、このような機会を与えていただきました。日本皮膚科学会会員の皆様に感謝申し上げます。COVID-19の感染状況がまだまだ予断を許さない状況であったため、感染対策を徹底したうえでの現地開催およびWeb配信併用のハイブリッド形式で開催させていただきました。

Be a dermatologist

近年、専攻医の地域分布や診療科の偏在などの問題に対処すべく、日本専門医機構が中心となってシーリング制を導入するなど、皮膚科医を含む臨床医を取り巻く環境は著しく変容しております。このような中、皮膚科医の責務が何であるか今一度立ち返った際に、どのような状況に置かれてもわれわれ皮膚科医は継続して皮膚科学に真摯に取り組むことが重要なのではないかと考えました。皮膚科専攻医の先生方はもちろん、すでに専門医資格を取得され、皮膚科医療の第一線でご活躍されている先生方も含め、改めて皮膚科医として皮膚科学に真摯に取り組む機会になるような大会にしたい、そのような気持ちを込め、今回の学術大会のテーマを「Be a dermatologist」といたしました。

特別講演

本学術大会では、特別講演に高名な3名の先生方にご登壇いただきました。特別講演1では「新型コロナと日本人の健康観」と題し、医師でありながら、小説家・推理作家でもある久坂部羊先生にご講演賜りました。自分自身と家族が病気を患ったときに陥りやすいダブルスタンダードな考え方、マスコミに振り回され先入観が固定化してしまった患者さんに関するお話など、たいへん参考になるご演題を拝聴しました。特別講演2では、奈良県立医科大学・化学教室の大崎茂芳名誉教授に「生体繊維の不思議—コラーゲン線維からクモの糸へ—」をご講演いただきました。弦にクモの糸を用いたヴァイオリン演奏などの演出に加え、ユーモアを交えながら科学の楽しさを聴衆に伝えてくださり、きっとたくさんの先生が研究に興味をもたれたことと思います。そして東京慈恵会医科大学・ウイルス学講座の近藤一博教授に「ヒトヘルペスウイルス6が潜伏感染状態で引き起こす疾患—うつ病ウイルス原因説—」をご講演いただきました。COVID-19感染後遺症としてうつ病を発症しうることが報告されつつあるいま、まさに旬の話題をご講演いただきました。

シンポジウム・教育講演

シンポジウムでは、私の専門分野である皮膚ウイルス学のほかに、膠原病、遺伝性皮膚疾患、皮膚外科手術に関するシンポジウムを開催いたしました。中でも、「形態から考える皮膚病変」と題しまし



図1 シンポジウム「形態から考える皮膚病変」の様子

て、東京女子医科大学の田中勝先生と当教室の小川浩平先生が中心となって、ダーモスコピーや皮膚エコーから推理する皮膚科学についてパネル形式で解説を行いました(図1)。普段の学会や講演会では類をみない新しい試みでしたが、たくさんの先生にご聴講いただき、成功裡に終わることができました。また、教育講演として、薬疹、皮膚悪性腫瘍、自己炎症性疾患、自己免疫性水疱症、そして下肢切断と下肢救済に関するエキスパートの先生

をお呼びしてご講演いただきました。

おわりに

残念ながらハイブリッド開催となりましたが、500名を超える方々にご来場いただき、Web参加も含めまして、合計1,300名近くの先生方にご参加いただきました。ご参加いただきました皆様、事務局長の新熊悟先生をはじめとする教室員(図2)や同門会員の先生方、そして、日本皮膚科学会大会運営部の皆様、とくに関千尋様や山田紀子様にご心より御礼申し上げます。また、ご賛助いただきました企業ならびに個人の皆様に格別のご高配を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。



図2 教室員とともに